

通所介護事業所における口腔機能向上サービスによる効果

～介護予防のためのお口歯つつ支援事業から～

○上野 路子、森口 康子、山口 亜紀子、山中 千佳也、荒木 勇雄（滋賀県甲賀健康福祉事務所）

緒言

介護予防の重点課題のひとつである口腔機能向上への取り組みは、介護予防だけでなく、QOLの向上や誤嚥性肺炎の予防等の重要な役割を担っている。

しかし、高齢者の日常的な介護に携わる介護従事者の中には、口腔領域に苦手意識を持っている方が多くいる。通所介護事業所における口腔機能向上の取り組みは、多くの事業所において健口体操や口腔ケアの取り組みが実施されてきているが、滋賀県において口腔機能向上加算を算定するまでに至る事業所は少ないのが現状である。

そこで、地域高齢者の口腔機能向上を目指して、事業所の介護従事者が口腔機能向上に関する知識・手技を習得し、積極的な取り組みを推進する者の増加を目的として、平成25年度および平成26年度に「介護予防のためのお口歯つつ支援事業（以下、モデル事業）」を実施した。本研究では、その介入効果について評価した。

対象および方法

1. 対象

各年度3事業所ずつモデル事業を実施した。対象は、事業に参加の協力が得られた利用者、平成25年度54名、平成26年度42名の計96名および事業所職員である。

本研究では、初回および再評価ができた利用者、平成25年度48名、平成26年度29名の計77名（follow-up rate：80.2%）について分析した。

2. 方法

1) モデル事業について

3か月間に1事業所あたり計8回歯科衛生士を派遣し、利用者に対して口腔機能向上サービスを実施、事業所職員に対して口腔機能向上サービス実施に関する助言・指導を行った。計8回のうち、2回を口腔機能評価、6回を口腔機能向上サービス管理計画に基づく口腔機能向上サービスを実施した。

歯科衛生士が行った口腔機能向上サービスは、口腔機能に関する情報提供、口腔清掃の補助・指導、食事介助の観察・指導、口腔機能維持向上のためのレクリエーション等、歯科衛生士が必要と認めることについて実施した。

また、口腔機能評価に用いた項目は下記のとおりである。

①基本チェックリスト

かみにくさ（あり/なし）、むせ・飲み込みにくさ（あり/なし）、口の渇き（なし/あり）

②視診による口腔内状況

衛生状態（不良/良好）、舌の汚れ（あり/なし）、義歯の使用（あり/なし）、義歯の不具合（あり/なし）、義歯の汚れ（あり/なし）、口腔内所見

③口腔機能の状況

オーラルディアドコキネシス「パ・タ・カ」（回/秒）、ブクブクうがい「右・左・全体」（十分/不十分）

④食事風景の評価

⑤口腔機能の問題点

2) 統計分析

口腔機能評価のうち①基本チェックリスト、②視診による口腔内状態（口腔内所見を除く）、③口腔機能の状態の各変数を用いた。2値変数はMcNemar検定、連続変数はt検定で介入効果を分析した。分析には、SPSS23.0を使用した。

結果

かみにくさがある者は、初回時23名（29.9%）から再評価時24名（31.2%）へ増加した。一方で、むせ・飲み込みにくさがある者は23名（29.9%）から19名（24.7%）へ、口の渇きがある者は37名（48.0%）から33名（42.9%）へ、衛生状態不良の者は21名（27.3%）から17名（22.1%）へ、舌の汚れがある者は32名（41.6%）から22名（28.6%）へ、義歯使用者は55名（71.4%）から56名（72.7%）へ、義歯使用者のうち義歯不適合者は24名（43.6%）から21名（37.5%）へ、義歯の汚れがある者は21名（38.2%）から15名（26.8%）へ、ブクブクうがい（右）不十分の者は28名（36.4%）から22名（28.6%）へ、ブクブクうがい（左）不十分の者は29名（37.7%）から22名（28.6%）へ、ブクブクうがい（全体）不十分の者は15名（19.5%）から7名（9.1%）へ、口腔機能の維持向上がみられた。

McNemar検定による分析の結果、「ブクブクうがい（左）」（ $P=0.04$ ）および「ブクブクうがい（全体）」（ $P=0.02$ ）で有意な改善がみられた。それ以外の変数については、有意差は認められなかった。

また、表1にt検定の結果を示す。オーラルディアドコキネシスの介入前後の評価を比較すると、すべての変数において有意な改善が認められた（ $p>0.01$ ）。

表1. オーラルディアドコキネシスの介入評価

	初回平均値 (回/秒)	再評価平均 値(回/秒)	標準 偏差	t 値	p 値
パ	3.08	3.66	1.32	-3.73	.000
タ	3.22	3.72	1.51	-2.78	.007
カ	3.08	3.51	1.24	-2.97	.004

考察

本モデル事業で通所介護事業所へ歯科衛生士を派遣し、口腔機能向上サービスを実施した結果、ブクブクうがいおよびオーラルディアドコキネシスの有意な口腔機能向上がみられた。しかし、有意な改善が認められない変数や、個人でみると口腔機能状態が変化しなかった者および悪化した者も存在する。これらのことから、3か月間の介入では十分な効果が得られない可能性があると考えられる。今後、継続した口腔機能向上サービスの評価が必要である。

また、モデル事業を実施したことにより、口腔機能の向上だけでなく、利用者および事業所職員の口腔への関心が向上した。そして、実施した6事業所のうち5事業所において、事業終了後に口腔機能向上加算の算定が開始された。

口腔機能の向上および誤嚥性肺炎等の予防のためにも、地域において口腔機能向上の取り組みを実施する事業所等の増加に向けた相談支援や、関係機関と連携した口腔機能向上の体制づくりが今後の課題であると考えられる。